

## ◀S·E·L·D·A·A▶ No.8

上智大学英語学科同窓会  
東京都千代田区紀尾井町7-1  
上智大学英語学科事務室 気付

平成元年2月24日 発行

## Sophia English Language Department Alumni Association

今回のSELDA A会報は、上智大学外国語学部英語学科創設30周年を記念して、教員、OB・OGらの声を集めた特別号と致しました。

## Viva! 英語学科

英語学科長 楠瀬 淳三

英語学科(Department of English Language and Studies)が、英文科より独立して誕生したのは1958年のことであった。ちょうど今年で30歳を迎えたことになる。人間にたとえるなら、ひとまず一人まえになったということであろうか。また英語学科の卒業生の数も年々増え、今年9月末現在で、4,192名を数えている。そして実社会の各分野で活躍めざましい方々が多いと聞く。喜ばしい限りである。

英語学科は、現在定員160名で全学のなかでも学科としては、毎年かなり多数の志願者を集めている。きびしい入学試験をパスしてくる新入生に問いかけてみると、入学時において英語力を身につけること以外に、明確な目的意識をもっている新入生は少ない。また3・4年次生のもっとも大きな悩みは、第一に、英語力が十分でないと思っている。私自身、機会あるたびに、学生諸君に「上智大学・英語学科に入学したからといって、井の中の蛙になるなかれ!たえず本物(authentic)の英語力を目指して精進せよ」といつている。具体的には、「英検」(いろいろな英検ができていくが)「ガイド試験」等により自分の実力をみがくことも一法であろう。要は、英語学科へ入学しても常にupward mobilityを忘れない心構え、つまり向上心であろう。実社会に於いてもこれは、まったく同じことであろう。

英語学科創設30周年にあたり、英語の4技能において「使いこなせる」人材の育成を最優先に、われわれ英語学科教員は、全力を傾ける覚悟である。より立派な英語学科卒業生を社会に送り出すために、service & sacrificeの精神を大切に、今日も英語学科の更なる充実発展のために頑張っていきたいと願っている。

## 英語学科創立三十周年によせて

外国語学部教授 羽鳥 富美雄

わが英語学科は今年で創立三十周年を迎えたという。私が上智大学に職を奉じたのが1957年(昭和32年)、31才の時、つい昨日のように思えるのであるが、それがもう停年を間近にひかえた年齢に達していようと、時の流れを痛切に感ぜざるを得ない。翌58年、文学部英文科から分れて、外国語学部英語学科が開設された。初代学科長は野口啓祐教授であった。当時英語学科というのは全国でも珍しい存在であって、その開設は学校当局の一大英断であった。外部の人達や企業の人達から英文科との性格の違いなどよく聞かれたものである。今日の英語学科の躍進隆盛の姿を目のあたりにすれば今昔の感に堪えない。

この三十年の年月の間には色々な出来事があったが、何といっても学科の最大の危機は創設十周年を迎えた1966年、牧歌的な雰囲気の中で突如として学園紛争の嵐が吹き荒れたことであった。六月に全共闘会議が結成され、十一月にはバリケード封鎖に発展、十二月に機動隊が導入され、六ヶ月にわたるロックアウトが行われたのであった。この間われわれ教職員は上智会館に泊り込みで警備に当たったが、日頃余り交流のなかった他学部の先生方、職員の方が、守衛さん達とも親しくなったのは思わぬ収穫であった。

しかしこの危機を乗り越えると、これまでの行き方を変えなければならないという時代の要求から学内改革の波が打ち寄せてきたのである。矢つぎ早に改革案が出され、国際関係副専攻の開設と、主専攻、副専攻の制度の

導入、地域研究の重視、カリキュラム面における細かい改善等等、今日に至るまで枚挙にいとまがない程である。今や英語学科は激動期を経て安定充実期を迎え、それに伴い卒業生諸君の各分野における活躍ぶりには目を見張るものがあり、まことに喜ばしい限りである。

## 英語学科生として最初の卒業

小林 康司 (昭和34年卒)

昭和30年に上智大学に入った時は全員が文学部英文学科。しかし中には文学青年より実用英語を希望する者も多く内心東京外国語大学のようになればと思う仲間も結構いた。そうした処に外国語学部が創設され我々英語学科生は正に渡りに船と云った感じで移った。そして英語学科生としては第一回の卒業生、つまり英語学科創設三十周年を迎えた。この間故川端康成のノーベル賞受賞式で通訳を務めたサイデンスティック先生に一年間翻訳論を習った事を外人に自慢した記憶もある。英語学科はその後評価が高く入試の際の偏差値も一流大学の高さになった。今では昔の卒業生は入学できない程だと言われるようになった。先輩として優秀な学校を卒業できた事を誇りに思う。そこで何人かの同級生に思い出の寄せ書きを送って貰ったので、そのまま紹介させていただく。

まず、オランダ航空営業部長の秋田芳彦君「卒業式で学長から指名され英語学科総代で皆の卒業証書を受けとりました。成績一番の山本君が欠席で次はABC順で私の証書が、あったからです。」

次に何と言っても在学当時に一番の印象に残っているのは野口啓祐先生で先生についてタイトン株式会社専務取締役の小島辰夫君と沖縄那覇市で田野商事を経営の田野成成君は次のように共通の内容を書いてくれた。「野口先生は普段ズタ袋を持ち鳥打帽の容姿。口を開けばペランメエ調、まるでヤクザだ。しかし教授法はこの上ない心のもったものでガラの悪さと学問的業績の大きな断層にはただ尊敬の念を抱かせられた忘れ得ぬもの。」

こうした事から野口基金が設置されたと信じる。基金が増えより効果ある運営を望む。

最後にワールドインポートコート国際部長の菊地美聚君の在学当時の思い出を紹介する。

- ▷上智会館食堂の素うどんが十七円。
  - ▷一年から四年の殆んどが黒い学生服。
  - ▷三年になる時初めての女子学生が編入。
  - ▷ESSは立川米軍基地内米人教師と交流。
  - ▷二十円で渋谷駅前のニュース映画を楽しむ。
  - ▷来日間もないメイソン、グラジアーノ、ラブら若い先生方と学校生活を毎日楽しんだ。
- 以上わずかな紙面をさいただけだが最近の卒業生や在校生は読んでどう思うだろうか。

## フォーブス神父を偲ぶ

久山 元男 (昭和38年卒)

岡山の田舎の高校から上京して来た坊主頭の私が、胸ふくらませ、同時に不安な気持ちで、上智大学、英語科に入学したのは、早二十九年も以前のことである。その時のA31のクラス担任が、フォーブス神父であった。キャンパスの何処にいらっしやっても一目でわかる、あの大きな体をゆっくりと、教室に運んで、「ブッさん」(我々学生仲間はずっとこう呼んでいた。)は、毎日、我々DOPEsを教えて下さった。ESSにも4年間在籍した私にとって、フォーブス神父の影響は、はかり知れないものがある。1年生の12月に英語劇を上演することになり、何故か何の経験もない私が、主役の一人に選ばれた。題は「THE VALIANT」(勇者)、他に林忠厚、長谷川和彦氏らも出演した。翌年、この劇をESSの出し物として、第1回FUET(五大学英語劇)コンテストで上演し、見事、上智大ESSが優勝することができた。この一連の練習の間中、「ブッさん」は多くの時間を我々のためにさいて、英語劇の何たるかもわからない私のような「ド素人」に、正に手取り足取り教えて下さった。眼鏡の奥の、あの大きなやさしい目で我々をいつもやさしく見守ってくださった。一度として「ブッさん」の険しい顔に出会ったことはない。私の上智大学四年間は、ESSと「ブッさん」の4年間であった。大袈裟に言えば、私のその後の人生を変えたと言っても過言でない、「ブッさん」との出会いであり、4年間であった。キャテキズムをSJハウスの部屋で1、2回受けただけの、不信心の私ではあるが、フォーブス神父の全身全霊を捧げた教育と信仰への絶えることのない献身は、私はもとより、神父に接する全ての人々に多大な影響を与えざるにはおかなかったと思う。私は上智大学で学んだことを大変誇りに思うと同時に「ブッさん」と出会ったことをそれ以上に私の一生の大きな財産であると思う。DIAPHRAGMを震わせる、あの慈悲深い声を思い出しながら、心から「ブッさん」を偲びたいと思う。

# 卒業して20年、今思うこと

浜崎(渡邊)維子(昭和43年卒)

英語学科を卒業して二十年、本当に年月が早く過ぎました。いっちょらの紺色のブレザーを着て、四谷の土手の下を緊張気味に歩いてソフィアンのひとりとなったのがまるでついこの間のことのように思われます。

高校まで男女共学で育ちましたが、英語学科では生れて初めて女子ばかりのクラスで、そのうえまわりの方がみな優秀に見えて、戸惑ったり、ついていけるかと心配したりいたしました。楽しく忙しかった学生時代が今となっては懐かしく思い出されます。始業の時間に厳しかった神父様(ドアの外で何回かネズミになりました)、宿題の提出に追われた日々、選択の余地もなく一方的にタイトルを与えられたタームペーパー、堀辰雄の英訳に励んだ一年間、今は亡き野口先生の格調高き授業(それにしても想いだすのはあの速記!)、国語の時間かと勘違いしそうな小稲先生の丁寧な添削指導、などなど数え上げればキリがありません。

卒業してからは正式に就職することもなく、上智のラボでアルバイトをし、まもなく結婚しました。育児に掛かりきりだった数年間を除いてはずっと近所の中学生や受験生に英語を教えてきました。思いがけなく短期間海外で生活する機会にも恵まれましたが、上智大学で呼吸した国際的な空気がまだ少し体に残っていたのか、カルチャーショックもなく家族ともどもおおいに楽しむことが出来ました。しかし残念ですが子供達は二人とも上智とは関係のない人生を歩むことになりました。さびつきかかった頭に油を差しつつ、これからの半生も英語とかかわり合いながら、同窓生の皆様と交流を深め、お互いに刺激し合って若々しく美しいOLD WOMENになりたいものと願っています。

## 我が師・我が先達

長内 芳子(昭和44年卒)

当時先生は丁度イギリスのラム姉弟を思わせる簡素にして愛情細やかな私生活を送っておられ、御自宅には先生を慕う若い学生が散見されることも稀ではありませんでしたが、その生活は一言で言えば隠者の生活でした。幾度となく御自宅に御邪魔させていただき、学問及び生き方全般にわたって親身な御指導を受けた折々に、先生の暮しぶりをまのあたりに見、深く感じられたことの数々は、私の終生の心の宝でありますから、その辺のことは心の秘所にそっとしまっておきたいと思います。私がこの拙文で綴りますことは、上智大学に於ける先生が多く、その学生に及ぼした影響力の甚大さそしてその御人柄についてでありまして、これは恐らく先生に直に触れ、その薫陶を受けた無数の学生が共通して感じていたことであろうと思われるのです。

先生のなさる全講義の中で「現代文学」の講義は白眉ともいべきもので、実際先生が心血を注がれた上智きっての名講義でありました。若き日々の常として心に暗く鬱屈するものを持ちしかも知的好気心に満ち満ちた学生にとっては、上智に於いて唯一救いの場となるような、静かではありましたが息を吐き出し、先生と学生が一体化した熱気に満ちたすばらしい講義でありました。この講義を聴いたことが学生時代の核となった学生は、実に数知れないのであります。

この講義では私の知る限りでは、現代の枢要な思想家、ニコライ・ベルジャエフ、マルティン・ブーバー、シモーヌ・ヴェユグが研究の対象でした。この思想家たちは皆それぞれに真の宗教者といってよい人たちで、この偉大な思想家の作品を通して、私たち現代に生きる者に絶対になくはならない大切なあるものを、私たち学生のひとりひとりに深く考えさせてくれたばかりでなく、この講義を聴いた学生に、平生は御自身の個人的なことを御語りになることの少なかつた先生の思想と生き方も、自ずとこちらに伝わってくる味わいの深い講義でありました。英文学者としての先生は、ウィリアム・ブレイク、T・E・ヒューム、T・S・エリオット、グレアム・グリーン等のすぐれた研究と講義をなさっておられましたが、晩年に向うにつれて一英文学者にとどまらず、確固たる信仰を持たない悲劇的な現代に生きる人間の実存の問題を、深く考究する方向につき進んでいかれました。

古くて常に新しい問題、つまり人間は如何なる存在であり、又如何なる存在であらねばならないかというこの本質的問題を、ひとりの思想家として生涯御自身深く悩み、考え抜き、やはり人間には何者かに対する信仰がどうしてもなくてはならないということ、深く確信していらっしゃいました。私は直観的に、先生は人間の絶望というものを知り尽しておられると同時に、その絶望する人間にも何かしら目には見えないが思慮とも言う外ないものが動いていることを感受しておられる方だという風に感じられました。先生の周囲の者に向けられる眼差しには、御自身絶望を経験し、その時何らかの啓示を受けてそこからはい上ってきた者に特有の厳しさと、また一面寛容とこの上ないやさしさが宿っていたと思われるのです。

一見豪放磊落に見え、時には人をくったようにさえ見えるところがおありでしたが、先生の人間としてのたゞずまいにはどこか気品が漂っておりました。人間の偽態、偽善、名聞欲、虚飾を憎む高貴な種族に属しておられ、真に偉大なるものを知っている者の内気さを持ち合せておられました。W・エバレット先生は、野口先生逝去の直後に出された追悼号の中で、先生をシャイな方であったと述懐していらっしゃいますが、それは至言でして、

私も共感するところ大いにあるのです。今日、先生は私にとって懐しい方というよりもむしろ、常に私の前方を歩んでおられる我が師、我が先達といった感が深く、私には依然として生きておられる方としか思われたいのです。時々先生はあの御顔をこちらにお向けになりますので、私もうかうかしてはいられないのであります。

## 上智の思い出

松本 義人（昭和63年卒）

恥ずかしい話だが、上智に入学した頃、私は英語を全く話せなかった。

二次試験の面接でのことだ。外人の先生（あれが生まれて初めての外人とのコミュニケーションだった。）が英語で質問してくるが、さっぱりわからない。“You will be successful” のようなことも言ってくれたが、どう答えたらいかがわからず、日本人独特のあのごまかし笑いをして教室を逃げるように出ていった。よくもまあ、あんなので合格したものだと思う。

そんなわけで、入学後も、英語の授業の思い出にあまりよいものはない。聞けない。話せない。さらに自信があったはずの読むことでさえ、受験英語だけではどうにもならないことを知った。教室で英語で質問された時、下を向いて黙っているという日本流の逃げも上智では通用しないこともわかった。必修以外で外国人先生の授業を選択することは考えもしなかった。転部さえ考えたほどだ。

ずばり私の上智の思い出と言えば課外活動そのものだ。二年の時、オリキャンのヘルパーをやった。軽い気持ちで応募したのだが、半年も前から準備をする実は大変な企画だ。オリキャンの二日間はあつという間だった。劇をした。徹夜のゲーム。友達の輪がぐっと広がった。担当のDグループの20人からの色紙は今でも大切な宝物だ。

もう一つSTPに参加したのもよい思い出だ。地方の中学生に英語の楽しさを伝えるという一見安易そうな企画も、社会的責任のつきまとう大変なものだ。一週間の授業のために一年近い準備をする。英語力も英語教育の知識も無だったあの時期に教壇に立ったのは、今思うと無謀だった気もするが、熱意だけで生徒をひっぱっていった。実に充実していた。

こんな私は今、本物の教師をしている。大変な仕事だが、四年間の落ちこぼれの経験と二つの課外活動の経験がとても役立っている。そして同時に、学生でいることの気楽さをあらためて感じている今日この頃だ。

## 英語学科創設30周年記念パーティー報告

去年の11月26日、上智会館第6会議室において「英語学科創設30周年記念パーティー」が開催され、当日は厳しい寒さにもかかわらず、教員・卒業生あわせて約100名が参加し、旧交を温めました。

30周年記念パーティー準備委員長犬飼研介さん(37年卒・第一回入学生)とSELDAA会長鈴木達也さん(38年卒)の開会の挨拶に続き、84年に退官されたマケックニー先生の音頭で乾杯。途中、小林康司さん(34年卒)をはじめとする第一回卒業生が在学当時のエピソードを披露し、盛んな拍手を浴び、さらに、京都の聖母短期大学に移られたエバレット先生、サバティカルでアメリカ滞在中のニッセル先生からの以下の通りのメッセージが紹介されるなど、終始なごやかな雰囲気で行進しました。

しめくくりには、現英語学科長楠瀬淳三先生(39年卒)の音頭で上智大学校歌を全員が斉唱し、それぞれ気の合う仲間同士、2次会へと散って行きました。



## CONGRATULATIONS ON THE 30th ANNIVERSARY OF S. E. L. D. A. A.

W. Everett, S. J.

I'm so sorry I can't be there to join in the celebration of this 30th Birthday Party of SEL-DAA. With Fr. Nissel in the US this year, me down here in Kyoto, Prof. Noguchi, Frs. Forbes and Mason in heaven, and so many other former teachers retired, I suppose there are few of the "old timers" left among the faculty. Instead, it is those of you who graduated in the late 50s or early 60s who now take our places as the "old timers" of Eigoka. Thirty years bring about a lot of changes.

As you perhaps know, in the junior college where I am, I belong to a new 国際文化学科. We spend a great deal of time talking about the need of, and ways to achieve 国際化. This, of course, is a current topic all over Japan, but I find the whole thing rather boring and out of date. In short, it was only when I came here that I realized how truly international Tokyo, Sophia, and our English Language Department have always been. What is being taken up in other parts of Japan as a new, important topic is what Eigogakka has been doing for the past 30 years. I guess that is what accounts for the success of our department and university—we were among the very first in the nation to be moving in the right direction. So all of you are already what most other Japanese hope to be some twenty years from now. Yes, Tokyo, Yotsuya, Sophia, Eigoka are internationalized, but it will still take some time for this mood to penetrate the outlying districts of Japan.

Another good point about Eigoka graduates is that you have all learned to deal naturally with foreigners. I never thought about this at all when at Sophia; everything seemed so "natural". But I now am with people who have seldom met 外人, so I frequently receive what I call "panda treatment". Everyone is curious and friendly, they wouldn't mind having a photo taken, but 15 minutes or so with this exotic creature is enough. It is impossible to think of talking about real problems of your real life with a panda. But, happily, all of you deal easily with foreigners. There may be differences of opinion, all kinds of problems—but that is just part of the human condition. There is nothing like the wall between humans and pandas. That is why all of you are doing such a fine job in your various positions in society at present.

So far most of you, in line with Japan as a whole, have gone out positively to deal with Americans and Europeans, and have been most successful in your human relations with them. But, while keeping good friends with the west, there is increasing need for Japan to establish ties with Asian countries. Whether the common language will become Japanese or English is not clear, but for the moment English is still in the stronger position, so I hope that some of you may become more intimately involved in work in the Pacific areas, and can use your talents to promote good will and understanding between Japan and our Asian brothers and sisters in the future.

So carry on your great work! I'm sorry I'm not there to drink a toast with you all tonight on this 30th Anniversary celebration—but I promise to be there for the 50th! So till then. . .

## EIGOKA ALUMNI ASSOCIATION

John J. Nissel, S. J.

I am very happy to join you on the 30th anniversary of the English Language Department,—even though I am on the other side of the world. Already the Alumni Association is five years old, and we can look back on many eventful occasions. Now we have to look forward to our next five years and plan accordingly.

This sabbatical has been very profitable to me, not so much in what I have learned from books, or about America, but what I have learned about Japan. I see now, and more clearly, the necessity for the Japanese to become "international" in their education.

I was surprised at the lack of positive reporting about Japan in the newspapers and magazines. The readers naturally believe,—and repeat!—what they read and form their opinions accordingly. It is only by people in other countries meeting and understanding Japanese on a personal level,—one to one—that Japan and its people and policies will be properly understood.

This anniversary is an opportunity for all of us, faculty and alumni, to reflect on the past and what we have accomplished, and to plan to better our results in the future. Only by closer cooperation of alumni and faculty can we do this.

**昭和62年度収支決算及び昭和63年度予算承認される**

昭和63年6月4日に行なわれました昭和63年度第1回幹事会にて、下記昭和62年度収支決算及び昭和63年度予算案が承認されましたので、ご報告申し上げます。

科 目		昭和62年度 予算	昭和62年度 決算	昭和63年度 予算	摘 要
収 入	1. 前期よりの繰越	1,219,864	1,219,864	1,359,166	
	2. 入会金	100,000	183,000	100,000	
	3. 会費	1,200,000	1,050,000	1,000,000	
	4. 受取利息	30,000	27,552	25,000	
	合 計	2,549,864	2,480,416	2,484,166	
支 出	1. 名簿作成積立金	450,000	450,000	450,000	
	2. 名簿作成準備金	200,000	0	256,000	
	3. 会報	250,000	150,500	250,000	
	4. 郵送料	259,000	234,780	259,000	
	5. パーティ補助金	100,000	68,920	150,000	
	6. 講演会	50,000	20,000	0	
	7. 女性セミナー	50,000	53,450	70,000	
	8. 常任委員会運営費	50,000	40,040	50,000	
	9. 事務局運営費	150,000	77,090	200,000	
	10. 幹事会運営費	50,000	14,400	40,000	
	11. SELF活動援助金		0	50,000	
	12. 野口基金運営費		12,070	0	
	13. 予備費	940,864	0	709,166	
合 計	2,549,864	1,121,250	2,484,166		
差 引 収 支		1,359,166			

**■会計委員よりのお願い**

本年度予算では約4,000人近い会員の方々の内500人の方に会費を納入していただくという収入予定を立てております。これに対し、10月1日現在350人の方にのみしか会費を納入いただいております。今年には会員名簿の発行を予定している関係もあり会費未納の方は至急納入いただきたくお願い申し上げます。(会費納入済の方には無料で配布致します。)

尚、今迄に一度も会費を納入されていない方は、入会金も併せ納入願います。

入会金：1,000円

年会費：2,000円(出来れば3年以上分お納め願います。)

入会金・会費の納入は同封の振込用紙にてお願い致します。これまでのご自分の納付状況不明の方、あるいは何か質問のあります方は会計委員 込山 宅 (03-706-3008)までご連絡下さい。(夜9時迄にお願いします。)